

## 「百点貯金」から学んだこと

北海道・札幌市立真栄中学校 3年 長嶋 咲未

「百点貯金」が始まったのは、私が小学3年生の頃でした。算数か何かの満点の答案を見せたときに、祖母が提案してくれたのです。「百点貯金」とは、私がテストで100点をとったら100円が貰えて、それを郵便ポストの形をした貯金箱に貯める仕組みのことであり、祖母と私の約束です。

正直、小学校のテストは簡単だったので、100点をとることは決して難しいことではありませんでした。だから、この仕組みが始まってから、私は100点を取り、100円を貰い続けました。私にとって「百点貯金」は、都合の良いお小遣い稼ぎのようなものでした。

最初の頃は、私は貰ったお金をきちんと貯金し、大切に貯めていました。ところが私は、小学校高学年になるにつれて、「友だちと遊ぶんだ。」とか、「欲しい物があるんだ。」とか言って、貯金箱の開けづらい蓋を開けるようになっていました。

中学生になると、テストが難しくなって、100点がとりづらくなりました。祖母に満点の答案を見せることは格段に少なくなりました。

私が中学2年生だった去年の中頃、祖母に、「咲ちゃん（私）に100円、あげたいな。」と言われました。私にお金をあげたら、祖母のお金は減ってしまうのだから、私は、変だなと思いました。

母にこの話をすると、「おばあちゃんは、咲未（私）に百点貯金の100円をあげることが楽しみなんだよ。だって、それって咲未が頑張ってるってことだからね。応援しているんだよ。」

と言われて、私はハッと気付きました。祖母から貰っていたものはお金だけではなかったことに。私は恥ずかしくなりました。お金を貰うという事実しか見

ていなかったから。今までそんなお金を惜しげも無く使っていたから。私はそんな自分を悔い改めたいと思いました。

こうして、私が祖母から貰っていたものは、ただの100円硬貨ではなく、祖母の、私に対する「頑張れ。」という気持ちのこもったお金だということに気付いた今、私はそのお金をどう使うか真剣に考えています。

祖母の気持ちは100円硬貨となって、私の中で「頑張ろう。」という次への活力を生み出してくれます。100円硬貨に込められた「想い」は私の中で確実に生きているのです。貰う側の私が言うのは上から目線かもしれませんが、これを、「活きたお金の使い方」と呼ぶのではないのでしょうか。

だから私も、そのお金を活かし続けたいのです。しかし、今までよく考えることもなくお金を使ってきた私には、「活きたお金の使い方」というものを考え、実践することは、難しいことのように思います。

私にとっての、「活きたお金の使い方」って、何だろう。「頑張っ<sup>て</sup>ね。」という言葉と一緒に貰ったお金だから、自分の将来のために使いたい。どうすれば、将来に活かすことができるのだろう。本を買って読み、教養を深める？参考書を買って勉学に励む？それとも、将来本当に必要になったときのために貯めておく？

何が正解なのかなんて、今の私には全くわからないし、正解など無い気がします。

私がただ一つ<sup>たど</sup>辿り着いた結論は、「活きたお金の使い方」をするには、そのお金に込められた意味や、何故お金を貰えるのかということを考え、「ありがたい」と思うことが必要不可欠だということです。当たり前のことのように見えますが、それを考えている中学生は多くないでしょう。月々のお小遣い、貰えて当たり前だと思っていないですか。私は思っていました。「お小遣いを貰うのは私の権利だ。」などと傲慢なことを母に言ったこともありましたが、でも、それは間違っています。母は、私がお小遣いで友達と遊んだり、読みたい本を読んだりして楽しんでほしいからお金をくれるのです。私たちの権利なんてことはなく、母の「想い」によってお小遣いという制度が成り立っているのです。

祖母から貰うお金も、母から貰うお金も、働かない私たち中学生が持っているお金は全て「想い」なのです。

祖母の何気ない一言によって、私は学び、成長しました。これから大人になるまで、お金を使う場面は幾度となくあるでしょう。郵便ポストの形をした貯金箱からお金を取り出す日もやって来るでしょう。私はその度にその物が本当に必要か慎重に考えたいです。そして、思い出したいです。そのお金に込められた意味と「想い」を。

